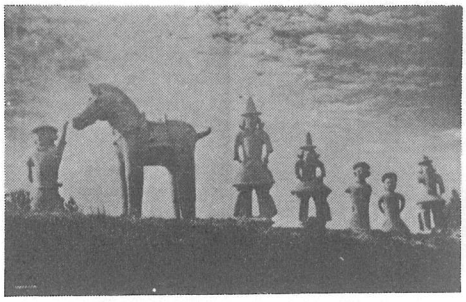
町史シリーズ

古墳文化

―武社国造の繁栄―

稲作農耕を中心とする弥生文化の円熟は、原始共同体（村落）の内部に身分的な階級を発生させ、各地の村々には「豪族」が割拠するようになりました。その豪族たちを統合する大豪族は、大和の朝廷から「国造」に任命され、いわゆる〝古墳文化〟の時代が始まるのです。

川戸彰氏の研究（註1）によれば、九五〇基をこえる山武郡下の古墳のうち八〇％近くが郡北台地に集中しているといわれ、そのうち〝芝山古墳群〟は最大のものです。横芝地方にも中台・町原・寺方の古墳群があり、その総数は四三基（前方後円墳四・円墳三四・方墳一・横穴一・経塚三）をかぞえ、特に中台の殿塚・姫塚は全国的にも有名な前方後円墳です。



―埴輪の行列―

芝山古墳群の支群を形成する殿塚・姫塚（国史跡）は、ともに六世紀の築造と推定されており、昭和三一年、早稲田大学の滝口宏教授によって学術調査（註2）が実施されました。殿塚（長径88M・比高10M・二重周溝）は後円部に羨道と玄室をもち、多数の副葬品が出土しました。一方、姫塚（長径58M・比高6M・一重周溝）は前方部に埋葬施設があり、副葬品には殿塚にはみられないみやびやかさが加味されていました。北側墳丘には多数の埴輪（県文化財）がめぐらされていて、約50Mにわたり当時の葬送の行列を展開していました。出土した埴輪は総数四四個で、ひざまずき両手をついた男、日笠風の帽子をかぶり筒袖の上衣をきて、鎌を腰にさした農夫、警固の武人、琴を膝においた男など当時の日常生活がしのばれます。埴輪の行列は遺骸の運搬を中心に関係者の列を描いたものと考えられますが、土の中からにじみ出る庶民的な感情がリアルに表現されています（写真参照）

この埴輪の行列にかこまれた古墳の被葬者誰か――おそらく武社の国造につながる地方豪族でおろうと推定されています。武射地方における国造族の奥津城（墳墓）としては、旭岡古墳（松尾町）・権現塚古墳（同）などをもつ木戸川上流の地域が最も有力であるといわれ、殿塚・姫塚もその系列とみるべき位置を占めています。郷土地方を支配した武社国造とは、一体どのような氏族であったのでしょうか。

―武射の国造―

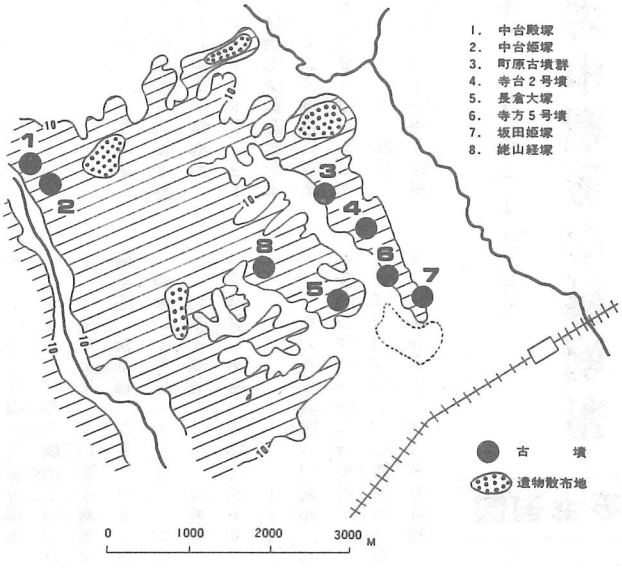
平安初期（九世紀初頭）の撰録になるといわれる『先代旧事本紀』第十巻（国造本紀）には、「武社国造。志賀高穴穂朝。和邇臣祖彦意邪都命孫彦忍人命定ニ賜国造ニ。」とあります。成務天皇の世に彦忍人命が武社国造に任命され、木戸川・栗山川の流域地方を支配地として、和邇一族の牟邪臣が活躍したと伝えられ、芝山町の宮門神社は和邇神（彦忍人命）を祭神としています。角川源義氏の研究（註3）によれば、和邇一族は入江のある水系を掌握してたつといわれ、九十九里最大の規模をもつ栗山川溪谷の入江が国造一族（牟邪臣）の生活拠点となった可能性は大きいといえます。

殿塚・姫塚古墳の被葬者は、やはり武社国造の一族であると考えられ、芝山古墳群が武社国の中央部を形成していたと考えられます。

―古墳の保存対策―

横芝地方の古墳群は中台（前方後円墳二・円墳一八）、町原（前方後円墳一・方墳一・円墳一一）寺方（前方後円墳三・円墳二三）の三群ですが、そのうち寺方古墳群は梅林造成のため大規模な破壊がありました。町の文化財審議委員会では、総合調査を実施するなど、埋蔵文化財の保存対策をすすめています。郷土の古代文化を解明するためにも、唯一の資料である〝古墳〟などの遺跡を、町民全体の共有財産として保存してゆかなければなりません。

横芝地方の主要古墳と遺物散布地



〔文化財綜合調査報告(1)〕

〔註〕

①川戸彰「再び山武郡の古墳について」（房総史学5・6）

②滝口宏「千葉県芝山古墳調査速報」（古代1・2・19・20）

③角川源義「和邇氏の伝承」「同ぼろしの豪族和邇氏」（日本文学の歴史1）

（文責・町史編纂室）